NPO

名取市

津波から逃れ、今だからこそ活動を続ける

大橋 信彦 名取ハマボウフウの会代表

取材日 2011.4.28

閖上（ゆりあげ）海岸で絶滅したと思われていた海浜植物「ハマボウフウ」が市民によって発見されたのをきっかけに、美しく健康な海岸の復元を目指して平成13年に発足。地域と連携しながら保護区を設置し、保護育成に取り組んできた。大震災による大津波で閖上地区は壊滅、保護区も土砂で埋まったが、再び保護区を設置し会の活動を続けている。

3月11日（金）14時46分

海岸作業用の軽トラ「ハマトラ号」のハンドルを握り、名取市役所に向かっていた。自宅と市役所の中間地点を走行していた時、激しい揺れに襲われた。前方を走っていた車が道路脇に停車したので、これに倣い車を止めた。長く激しい揺れに、今まで経験した事のない恐怖を覚えた。
この尋常ではない状況に、市役所へ行くのを取りやめ閖上にある自宅へ引き返すことにした。電柱は斜めになり、電線が切れ道路に垂れさがっていた。閖上から市街地に向かう車、閖上に向かう車で道路は混雑した。
やっとの思いで自宅に戻り、散らかった部屋の中で妻の無事を確認した。次いで、海辺に住む知り合いの老夫婦の家へと車を走らせた。老夫婦はこの時点では無事で、一声かけてまた自宅へ戻った。ハマトラ号は置き、もう1台の軽自動車で安全な場所へと車を走らせた。時刻は3時半を回っていた。生まれも育ちも閖上で、地元の地理を熟知している。どの道が混んでいるか、すいてるかは理解していた。電線が垂れ下がった県道を通っては逃げ遅れてしまう。名取川の土手沿いの道を通って仙台へ向かった。幸いにもそれほどの混雑もなく脱出することができた。
この10分後には津波の第1波が閖上に到達していた。仙台には姉が住んでいる。姉の無事を確認した後、再び妻と閖上に戻る事にした。ところが戻ってみると、風景が一変していた。家が流され、瓦礫の山が広がり、田んぼにはプレジャーボートが打ち上げられていた。当然自宅には戻る事はできず、その夜は名取市役所隣りにある市の体育館へ避難し、軽自動車で一夜を明かした。

震災翌日から

次の日、別の避難所へ移動して一夜を明かした。3日目から3月末まで、仙台の姉のもとに身を寄せた。姉の住んでいる高齢者向けの県営アパートは、行政の配慮か電気や水の復旧が3日程で回復

した。だが、移動するためには車のガソリンが必要になる。4時間並んで、5人前で販売が終了になったこともあった。けれども他にはもっと困難を抱えている人がいる、こんな苦労は苦労ではないと自分に言い聞かせた。仙台と名取の往復用に自転車を1台購入し、情報収集に努めた。
後に、無事を確認した老夫婦の婦人が津波被害にあったことを知った。
今回の震災でハマボウフウの会の会員の方が6名犠牲になり、1名が行方不明になっている。犠牲になった方の中には、市議会議員、町内会会長なども含まれていた。責任感の強い人々が、自分が逃げるのを遅らせてまでも多くの人々の命を救ったのだ。

海岸のお花畑復活を目指して

自宅を流され、今は仮設住宅で暮らしている。大津波により浜辺は大きな被害を受けたが、名取ハマボウフウの会では6月に海辺で活動する10団体と連携して「第2回ふるさと海辺フォーラム」の開催を予定している。周囲からは反対意見もあった。だが悩んだ末に、この時期にやることに意味があると開催を決めた。多くの人が苦しみ、悲しみの中にいる。けれどもずっと沈んでばかりはいられない。

春の日差しが心地良いこの季節、全滅したと思っていたハマボウフウの芽が数箇所で確認された。あの大津波に負けず、力強く芽吹いたハマボウフウに希望をもらった思いだ。会では今後、ハマボウフウ保護区の看板を新設し、何年かかるかはわからないが、子どもや大人が集う海岸のお花畑を復活させたいと考えている。

震災後、力強く咲いたハマボウフウの花

NPO 仙台市

自分たちにできることを。被災地に物資を届ける

山岡 講子 NPO法人環境会議所東北　取材日 2011.5.9

地域を中心とした環境と経済の独立に向け環境ビジネスの促進を目的に活動に取り組む。毎年「エコプロダクツ東北」を開催してきたが、多くの企業が被災、会場の夢メッセみやぎも津波被害を受け閉鎖、2011年度の開催は中止に。被災した今だからこそ復興と再生には環境に配慮した環境経営の推進が必要と考え、活動に取り組んでいる。

3月11日　14時46分

山形県米沢で中小企業・大学関係者を対象とした、低炭素社会構築をテーマとするシンポジウムを開催していた。地震が起きたのは休憩中。鳥たちが一斉に飛び立ち変だなと思った直後、何かにつかまっていないと倒れそうなほどの揺れが長く続いた。米沢は内陸部にあり地震が少なく、こんなに大きな揺れは珍しいと聞いた。館内放送とテレビでの報道で震源は宮城県沖、津波の予測は10mだった。

セミナーは中止とし、駅に向かったがすでに新幹線は不通、復旧の見込みもなくレンタカーで仙台へ帰ることにした。高速は通れないので飯坂経由で帰ることにした。両側のすべてが停電。真っ暗な道をラジオからのニュースを聞きながら走行した。道は陥没したところもある。時折の余震は走行中でもわかり、不安の中「多賀城に500人取り残されています、○○地区に200人取り残されています」と放送が聞こえてきた。アナウンサーの説明に『津波』という表現があまりなく、益々不安は募った。まさか内陸にまで津波が到達しているとは予想もしない。「取り残される」というのは一体どういうことなんだと見えない不安の中、

一路仙台に向かった。講師をお願いしていた吉岡先生と職員の高田と山岡、そして仙台から参加していた江成先生の4名の運命共同体だ。これが1人だったら帰ることが出来たのだろうかとぞっとする。

16時に現地を出て、仙台に着いたのは夜23時だった。仙台到着後、緑ヶ丘の江成先生が降り、向山では吉岡先生が降りることになり向山に向かった。周囲は停電で真っ暗、仙台港の火災の炎が赤々と見え、大変な事態であることを実感した。